

滋賀宣言

(第 20 回 INWEPF 運営会議・シンポジウム)

2025 年 11 月 13 日 日本、滋賀県大津市

【意義】

- ・ 本会議は、INWEPF 設立の契機となった滋賀県大津市において開催された。設立から約 20 年の歩みを振り返るとともに、この間に顕著となった気候変動対策の重要性や社会・経済状況の変化を踏まえ、第 7 フェーズ戦略の中でも、特に重点的に取り組むべき方向性について共通認識を深めた。
- ・ 本宣言は、第 20 回の節目を迎えた本会議の成果として、第 7 フェーズ戦略に掲げる今後の強靱で持続可能かつ生産的な水田農業の発展に向けた取組指針とし、第 11 回世界水フォーラムに向けた重要な発信と認識する。

【認識】

(世界情勢の変化)

- ・ 世界人口の増加に伴い、食料需要が増加する中、気候変動による異常気象の頻発化や地政学的リスクの高まりにより、世界の食料生産・供給は不安定化しており、長期的には食料需給がひっ迫していくことが想定される。
- ・ 持続可能な開発目標 (SDG s) や 2050 年ネット・ゼロの達成に向けた取組の進展など、世界的に持続可能性に対する意識の高まりが見られる中、農業・食品産業に対しても、自然環境や生物多様性へ影響を及ぼす課題への対応が一層求められている。
- ・ 2004 年の INWEPF 設立以降、都市化及び都市への人口流出に伴う農村人口・農業者及び一部耕地面積の減少、気候変動に伴う異常災害の激甚化・頻発化、農業水利施設の老朽化など、様々な課題への対応が求められている。

(水田かんがいの特性)

- ・ 水田は、人口扶養力が高いコメの生産基盤として千年以上に渡り耕作され、食料生産の場としての機能だけではなく、水田農業が継続して行われることで、グリーンインフラとしても、洪水の抑制、地下水の涵養、生物多様性の保全等、多面的機能を発揮してきた。
- ・ また、水田かんがいは、上流から下流に向けた水循環の中で、再生可能な表流水が利用され、取水された水の一部は、地中に浸透して地下水を涵養した後、再び河川に還元され再度利用されるなど、畑地かんがい等とは明らかに異なる水利用特性を有する。

【教訓】(※【重点活動】のポイント)

我々は次の項目について重要性を認識する。

- ・ 食料安全保障を確保するため、バリューチェーン全体における生産性及び持続可能性を高める取組を推進し、農林水産業全体で持続的な食料供給を図る。
- ・ 気候変動の影響により水供給の不確実性が高まる中、かんがい排水システムの近代化、既存インフラ活用の最適化、統合水資源管理を通じた流域管理の重要性の理解醸成等、気候変動への適応に向けた取組を推進する。併せて、間断かんがいの推進等を通じた温室効果ガス排出削減に取り組む。
- ・ 農業用水の利用効率及び水生産性に加え、湿潤地域と乾燥地域における水の価値や水利用の相違、水田農業が持つ多面的機能等の特性を踏まえ、適切な農地・農業水利施設の整備・保全管理を行う。また、水田農業における水・エネルギー・食料のネクサス等に係る認識を醸成する。

【重点活動】

(多面的機能とフードバリューチェーンの強化)

- ・ 人口増加や経済発展に伴う食料供給不安が増大する中、食料安全保障を確保するため、生産から消費までのバリューチェーン全体における生産性及び持続可能性を高める取組を推進する。
- ・ 農林水産業全体での持続的な食料供給を目指し、農業のみならず、水源を守る森林、水田や湖沼を活かした漁業、統合水資源管理を通じた流域管理の重要性を認識する。
- ・ 我々は、食料安全保障における水田農業の重要性について広く理解を呼びかけ、水管理、生物多様性保全、気候変動への耐性における役割を含め、水田農業の多面的機能の重要性を発信していく。

(気候変動に対応したかんがい排水システムの近代化)

- ・ 気候変動の影響により水供給の不確実性が高まる中、地下水を含めた持続可能な水源の確保・管理、かんがい排水システムの近代化、アセットマネジメントによる既存インフラ活用の最適化を図る。ダム の事前放流による貯水容量の確保、排水施設の整備、田んぼダムの取組等、洪水管理を含む流域治水の取組を通じ、気候変動に適応したかんがいシステムを構築することの重要性を認識する。
- ・ 水田はメタンの発生源であることを踏まえ、ICT 技術等を活用した適切な水管理による間断かんがい (AWD) 等の先進技術、農業水利施設を活用した小水力発電等の再生可能エネルギーの導入等を通じて、カーボンクレジット化も視野に、温室効果ガス排出削減に取り組む。
- ・ 我々は、気候変動に対してかんがいシステムが水田農業に果たす役割の重要性を認識し、強固な制度的枠組み、革新的な資金調達メカニズム、積極的なコミュニティの関与を通じて、これらのシステムの維持・改良・管理を行うことの重要性を強調する。

(水利用効率及び水生産性の向上)

- ・ 生活用水や工業用水の需要の増加を踏まえ、統合水資源管理、節水農業の実践、マイクロ点滴・スプリンクラー等の代替的・革新的なかんがい手法、精密農業技術、デジタル技術・データ駆動型モニタリングに基づく農業水利施設の整備・保全等により、農業用水の利用の効率化を図る。
- ・ ただし、主に水田農業が営まれる湿潤地域では、乾燥地域と比較し、年降水量が多く水資源量が豊富であり、平水時には、水の価値 (シャドー・プライス) が低く、水管理労力、インフラ整備コスト等の軽減のために水が利用される特性がある。
- ・ また、上述のように、水田農業では、洪水の抑制、地下水の涵養、生物多様性の保全等の多面的機能が発揮され、下流で水の再利用が可能であるなどの特性を有している。
- ・ 我々は、水利用効率及び水生産性に加え、こうした特性を踏まえ、強固な制度的枠組みと積極的なコミュニティの関与により、適切な農地・農業水利施設の整備・保全管理を行う重要性を強調する。
- ・ さらに、水はエネルギーや食料と相互関係を有することから、限りある資源の持続可能な利用・管理に向けて、水田農業における水・エネルギー・食料のネクサスに係る議論を進める。

この宣言文をもって、我々、19 の加盟国と 3 の国際機関 (FAO、IWMI、MRC) で構成される INWEPF メンバーは、関連機関と緊密に連携し、水田農業の価値と役割を次世代へ引き継ぎ、持続可能な社会の実現に貢献することを誓う。